

公開シンポジウム

方言研究から言語研究へ

【司会】

江口正（福岡大学）

【パネリスト】

有田節子（立命館大学）・下地理則（九州大学）・山田真寛（立命館大学）・衣畑智秀（福岡大学）

【ディスカッサント】

定延利之（神戸大学）

1. 本シンポジウムの趣旨¹

日本語方言に関する理論的な研究は、音韻論や形態論で進み、統語論や意味論では大きな進展が見られにくい。その理由として、意味を入れる形式には方言ごとのバリエーションが見られやすいが、意味そのものは普遍的な性質を持つこと、また話者にとって、方言の形式に対する内省は容易なのに対し、意味の内省は複雑な文脈を伴い容易ではないことなどが挙げられよう。

しかし、個別の方言の記述では標準語との用法の違いがしばしば指摘され、方言ごとに異なった意味のカテゴリーがあることは明らかである。問題は、そのような「用法の違い」を超えて、方言研究が言語研究一般に貢献するような知見を提供できるか、である。

このシンポジウムでは、実際フィールドに出てデータを収集している研究者をパネリストとし、方言データの収集から一般言語研究への貢献までどのようにデータと論理を構成して深化させていけばよいのかを議論する。またそのことにより、様々なデータを扱う研究者と理論に興味を持つ研究者の橋渡しを行いたい。

2. シンポジウムの流れ

司会者の発議に続き、前半では以下の順番・題目でパネリストが報告を行う。

1. 有田節子（立命館大学）

「条件文の時制とモダリティの意味論－方言条件形式「ぎー」をめぐって－」

2. 下地理則（九州大学）

「格体系を調べる方言調査票の開発・利用と問題点－九州・琉球方言の事例報告－」

¹ この趣旨は衣畑智秀氏の発案によるところが大きい。

3. 山田真寛（立命館大学）

「敬語体系の意味論・語用論—琉球与那国語の調査・分析の事例報告—」

4. 衣畑智秀（福岡大学）

「係り結びと疑問詞の量化—宮古伊良部集落方言の事例から—」

報告ののち、フロアからの質問・コメントを集めるために休憩をとる。後半ではディスカッサントよりコメントを受け、フロアからの質問・コメントも交えて議論を深める。

3. シンポジウムの目指すところ

本シンポジウムは様々な「橋渡し」を目論んで企画された。ひとつは理論研究者と方言データの橋渡し、もうひとつは方言研究者と理論の橋渡し、さらには理論研究者と方言研究者の橋渡しである。理論研究者にとっては、内省のきかない方言データは近づきがたい存在であり、方言研究者にとっては記述を洗練させて理論に結びつけるのは敷居が高く感じられるものである。

理論研究や文献研究を行っていたパネリストを含む今回のシンポジウムでは、こういった垣根をどのように超えて理論とフィールドのデータを結びつけるか、そのプロセスを示すことを目的としている。そのため、研究の結果を詳細に報告することよりも、研究のプロセス（失敗も含まれる）を開示し共有することに重点を置いた。例えば各パネリストの発表原稿は以下のような共通形式となっている。

1. 研究のきっかけ
2. 現象の検証に用いたデータセット
3. 言語研究における位置づけ

各パネリストとも、フィールドの様々な制約の中で得られたデータセットを元に理論的な提案に結びつけるタイプの研究者であるが、このような形で研究の手の内を示すことで、「橋渡し」につなげようとするものである。多くの方の参加を期待したい。

（文責：江口）